

社会技術革新学会誌の発刊に寄せて

—現場を基点に技術革新と制度改革・人材改新そして社会変革を論じる—

1970年代から1980年代に世界70数ヶ国を歩き回り、途上国に勤務する機会に恵まれた。そこで痛感したのが世界における日本の技術者そして庶民に対する信頼の高さであった。日々の食を気遣う人々が身の安全と心の安らぎのために必要としたのは日本製のラジカセであり、勉学をしたい裸足の子供たちが求めるのは日本製の鉛筆やボールペンであった。途上国の高官は、日本から来る大臣や大使ではなく、日本の技術者や現場の人々を尊称で呼び、ほんの些細な比率であっても日本企業が事業に係わることを熱望した。日本製品に対する評価の域を超えて、日本の技術者や働く人々に対する絶大なる信頼がそこにはあった。

世界の人々は、ひとりひとりが現場を基点に力を尽くし技術を磨き制度を改革し人材を改新し社会を変革して生活を高めていった日本の姿に、憧憬の眼差しを向けていた。しかし日本には、貴族の文物や武士の武具を集めた博物館はあるが、小学校から大学に至る学校教育でそうしたことを学ぶ機会がない。建国を支えた移民の生業を首都の中心に置く米国、産業革命を支えた人々の営みを誇りとしている英国とは大きな違いである。

明治から今日まで、そして廃墟と化した第二次世界大戦後、産業を復興し生活を再構築することに全てを投入してきたために、目を他に転じる余裕を持ち得なかった。改めて「技術の歴史」、「社会の歴史」、「人々の歴史」の視点から事柄を見直し、集大成・体系化することが必要である。特に、世界から評価の高い現場の日々の営みを中心におき、その姿を真正面から受け止めることが重要である。

生活や社会を支える現場は多様である。工場現場もあれば企画や販売そして経営の現場もある。大企業もあるが中小・中堅企業もあり、企業現場だけでも多岐にわたる。さらに公務や教育そして消費者・市民運動の現場もあり多彩である。それぞれの現場で技術革新や社会変革、制度改革や人材改新の努力が日々積み重ねられ、その集積が今日の生活や社会の水準を形成している。こうした実際の現場の姿を率直に語り、それが持つ意味と価値を論じ合うことによって、自己研鑽と世界への発信の機会とすることが、追走者から先走者となった日本にとって重要である。こうした機会を提供する場として、2006年6月に社会技術革新学会、通称、現場基点学会が発足した。

企業活動の一部である研究成果は投稿の対象になるにも拘らず、企業活動の根幹を成す企画・調査から生産・販売に至る活動や経営にかかわる事柄などは学会発表や論文投稿の対象になり難い現状を打破し、技術革新から社会変革まで企業現場に限らず社会を構成する諸々の現場の営みを広範囲に対象とし、口頭発表のための学術総会を開催するとともに論文投稿のための学会誌を発刊することを、社会技術革新学会は活動の柱に据えた。そして、より広範な分野の多様な人々が参画する意義を認めこれらの活動は学会の会員に限定することなく会員以外の方々にも広く開放することとした。

「互学互教」の精神のもとあらためて学問を現場の人々の手に取り戻し、「社会学連携」によって現場の人々にとって使い勝手の良い体系へと「知の世界」を昇華させていく「知の市場」の活動の一翼を担う社会技術革新学会の新たな一歩が、学会誌の創刊によって踏み出される。日本の技術や社会の信頼を損なうような事象が頻発する昨今、新たな「現場」の構築に一助となることを願ってやまない。

2008年9月1日

会 長 増 田 優